の

「おどし」がいているのをると、そののに、なんとなくのけだるさのようなものをじることがある。かわいらしいのシーソーのにけがついていて、それにのがしずつたまる。かにがまりながら、やがてけがいっぱいになると、シーソーはぐらりといてをこぼす。がにとけてけがねがる、がをたたいて、こおんと、くぐもったしいをたてるのである。

　ていると、な、やかなリズムが、にいつまでもりされる。がまり、それがにほどけ、しかしもこらないがまたからめられる。ただ、ったがをんで、のとのさをいやがうえにもきてるだけである。のれなのか、のれなのか、「おどし」はにれるものをじさせる。それをせきめ、むことによって、このけはかえってれてやまないもののをしているといえる。

　はこの「おどし」を、ニューヨークのきなのでたことがある。のいがいろいろとされるで、あのなのきがのをひきつけたのかもしれない。だが、ニューヨークのでははあまりにしすぎて、つのとのとのいをくゆとりはなさそうであった。それよりものにきげるやかなのほうが、ここではのとしてらかにのちをくつろがせていた。

　れると、きげる。

　そういえばヨーロッパでもアメリカでも、のにはいたるところにみごとながあった。ちょっとのあるにけば、はさまざまなをらしてのになっている。なローマのエステのなど、というのれがをぎっしりとめつくしていた。ももここではえにすぎず、なのがとどろきながらしているのにはをのんだ。それはれくバロックさながらであり、ほとばしるというよりは、をたててにしているようにえた。

　なと、な。

　そういうことをふとえさせるほど、ののにというものはない。せせらぎをり、をかけ、をってをることはあれほどんだが、のだけはにるまでれていた。はろしいものでのでも、のはやはりのものほどしくない。そのせいかでもでも、のはどことなくがけて、にしいのである。

　のはいていて、がきげるをめたということもあるだろう。ローマののが、をさせるのにであったということもえられる。だが、なをったが、をらなかったは、そういうなばかりではなかったようにわれる。にとってはにれるがしいのであり、したりねじげたり、のようにするではなかったのであろう。

　うまでもなく、にはそれとしてまったはない。そうして、がないということについて、おそらくはとったのみをもっていたのである。

「」というながあるが、そういうはむしろのによってづけられていた。それはにするなというよりは、に、なきものをれないのれではなかっただろうか。

　えないと、にえる。

　もし、れをじることだけがなのだとしたら、はをするのにもはやをるさえないといえる。ただするのきをいて、そのにれるものをにでわえばよい。そうえればあの「おどし」は、がをするのをすけだといえるかもしれない。